

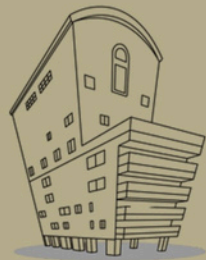
千代田区立障害者福祉センターえみふる ANNUAL REPORT

2024
令和6年度



自分を愛するように
あなたの隣人を愛せよ

社会福祉法人 武蔵野会



人と人、地域をつなげる

千代田区立障害者福祉センターえみふるの“えみふる”とは、「笑みがあふれる」という意味です。利用されている方や地域の皆様が、自分らしく充実した毎日を送れるように様々な支援を提供しています。本事業所は、平成 22（2010）年に社会福祉法人武蔵野会が指定管理者として運営を開始し、令和 2（2020）年からの新たな 10 年において「人と人、地域をつなげる『絆』を創り出す」ことをミッションに掲げました。私たちが目指す地域社会の実現に向け、10 年間の事業計画と目標（ロードマップ）にまとめ、その成果をアニュアルレポート（年次報告書）としてお伝えします。

アニュアルレポート（年次報告書）とは、本来経営的な数字を報告書としてまとめたものですが、私たちはロードマップに基づき活動してきた成果や取り組みの進捗を、数字や写真などより具体的な形で伝えることで、皆様と築いてきた関係を形にすることを大切にしています。本レポートからえみふるをより深く知っていただき「応援したい！」と思っていただけるよう想いを込めてお伝えしていきます。

「人と人、地域をつなげる『絆』を創り出す」

施設長あいさつ

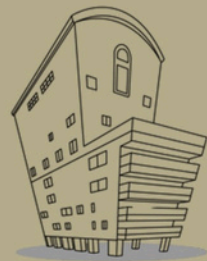
2024年度は、「ちよだんごカフェ」のオープンという大きな節目を迎え、えみふるが地域とより深くつながる新たなチャンネルを築いた年となりました。障がいのある方もそうでない方も、自然に交流し、自分らしく関われる“地域の居場所”として、多くの方にご利用いただいています。また、交流人口25,000人という目標のもと、行事の再開やスペースの活用、地域イベントへの出店など、にぎわいとつながりを実感できる取り組みが広がってきました。

2025年度から、バトンを受け継ぎ、えみふるの新たなステージを担わせていただくことになりました。今まで丁寧に築いてきた「誰もが安心できる、ひらかれた場」としてのえみふるの基盤を、しっかりと受け止めながら、さらに“自分らしさが活かされる場”へと進化させていきたいと考えています。職員一丸となって、地域の皆さまとともに学び、成長しながら、より多くの笑顔が生まれるえみふるを目指してまいります。引き続き、温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。



田部 季之

絆を創り出す



千代田区立障害者福祉センターえみふるは、知的・身体・精神の3障がいを対象とした福祉サービスを一元化した施設として、センターでの活動を通じて障がいを持った方が地域での自立生活を充実できるよう支援しています。また、地域の皆様がえみふるに集い、様々な活動を通して交流する地域拠点としての活動も展開しています

千代田区立障害者福祉センター

設立年月日 平成 22 年 1 月 1 日



- 基幹型
相談支援事業
- 特定相談支援事業
(計画相談)

相談
支援

通所
支援

- 生活介護事業
- リハビリサービス
- 療浴サービス
- ぷらっと御茶ノ水
- 日中一時支援事業

事業案内

- グループホーム
ふぁみりあ
- ショートステイ
ふぁみりあ

居住
支援

地域
貢献

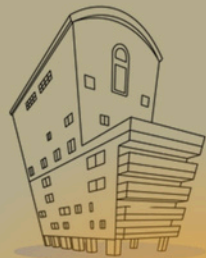
- 講習会、公開講座
- 団体利用（会場貸出）
- 養蜂プロジェクト
- ボランティア事業
- 企業、大学との連携

CHYODANGO
ちよだんご
CAFE



2024年4月に千代田区平河町で開設された「ちよだんごカフェ」は、だんごやドリンク、養蜂プロジェクトのはちみつの販売を通じて、障がいのある方と地域がゆるやかにつながる場を提供しています。15分単位での就労体験を導入し、本人のペースで参加できる新たな拠点としてスタート。地域イベントへの出店やスペース貸出も行い、「えみふる」の新たなチャンネルとして、多様な人々の交流と活動の場を広げています。





えみふるロードマップ

17

の項目

導入期

2020年4月
(令和2年度)
～

2023年3月
(令和4年度)

形成期

2023年4月
(令和5年度)
～

2026年3月
(令和7年度)

完成期

2026年4月
(令和8年度)
～

2030年3月
(令和11年度)

1 交流人口



10年後の到達点

障がいのあるなしに関わらず、すべての人が安心して自分らしく暮らし続けられる、共生のまち千代田区の実現を目指す。

形成期の目標

年間の交流人口25,000人を達成する

2 地域活動 支援センター



10年後の到達点

講習会内容を見直し、出席率を70%に向上。在住・在勤・在学者を対象とした事業を通じ、障がいの有無を問わず「小さな共生絆社会」の実現を目指す

形成期の目標

講習会充足率50%、利用者数16,000人を達成し
共生型事業の強化と展開を図る。

3 ぶらっと 御茶ノ水



10年後の到達点

利用者の方が無理なく参加できる講習会、公開講座、パソコンサロン等を開講し、人が集まれる憩いの場や居場所としてのえみふる内の役割を果たす。

形成期の目標

居場所づくり、団体が利用できるような場所づくり
を行う

4 日中一時



10年後の到達点

障がい児者の地域生活を安定的に支援し、障害児から障害者へのスムーズなサービス移行の環境を整え、継続的な支援に繋げる。

形成期の目標

ショートステイ、レスパイト、タイムケア機能強化を図る

5 グループ ホーム



10年後の到達点

利用者層を明確化し入れ替わり期間を短縮、空きゼロを維持する

形成期の目標

利用率を100%にする

6 ショート ステイ



10年後の到達点

利用者の用途に応じたサービスを提供し、地域生活を安定支援。他区からの受け入れも高い利用率100%を目指す。

形成期の目標

利用率を100%にする

7 生活介護



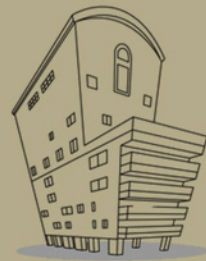
10年後の到達点

医療ケア対象者や他区からの利用者受け入れを可能にし、利用率70%達成を目指す。他事業所との差別化を図り、高齢化に伴う利用者や新規転入者の受け入れにも対応する

形成期の目標

利用率を60%にする

2020~2030



8 基幹型 相談支援



10年後の到達点

地域生活支援拠点としてコーディネーター機能を担い、関係機関と連携しながら横のつながりを強化します。地域全体で支え合う仕組みづくりを進めていきます。

形成期の目標

相談500件達成へ、地域包括・障がい児者事業所と連携し、生活支援拠点として整備調整

9 特定相談 (計画相談)



10年後の到達点

新規利用者を円滑に受け入れるための体制と仕組みを構築し、初期対応から継続支援まで一貫して行える環境を整備することで、安心して地域生活に移行できる支援体制を確立

形成期の目標

180 件の相談に対応する

10 社会貢献



10年後の到達点

交流の場となるコミュニティを形成し、来てもらうサービスから出向くサービスへ移行し、地域全体の活性化に貢献する

形成期の目標

地域ネットワーク強化、養蜂商品化、社会資源開拓、社協連携、年2回の地域イベント開催、カフェ運営

11 企業との 連携強化



10年後の到達点

企業との協働だからこそ可能な地域・社会貢献を積極的に展開し、えみふるの価値と役割を広く周知して、千代田区内での確固たる地位を確立する。

形成期の目標

連携企業数を6 社にする

12 大学との 連携強化



10年後の到達点

大学との連携だからこそ可能な地域・社会貢献を積極的に展開し、えみふるの価値と役割を広く周知して、千代田区内における確固たる地位を確立する。

形成期の目標

連携校数を2 校にする

13 アダプテッド・ スポーツ



10年後の到達点

障がい者スポーツを通じて、互いを理解し支え合う絆社会を実現する。地域や世代を超えて交流を深め、誰もが参加し活躍できる共生社会の基盤を築く取り組みを推進する。

形成期の目標

障がい者スポーツの促進と地域交流の推進

14 人材育成



10年後の到達点

施設における人材確保のための持続可能なシステムを構築し、あらゆる相談や支援要請に応え、地域で安心して暮らせる環境づくりを推進する。

形成期の目標

中核人材の育成と専門職採用、年間30人の実習生受入、学校交流会で安定的なサービスを構築。

15 ボランティア



10年後の到達点

途切れないボランティアシステムを構築し、活動の質向上を図るとともに、将来の職員や地域で活躍できるボランティア人材を計画的に育成し、持続可能な支援体制を確立する。

形成期の目標

年間300人のボランティア受入と大学・若者との交流を通じ、福祉教育で人材育成を図る

16 障がい者 文化の発信



10年後の到達点

アート活動を通じて地域とのつながりを深め、交流と共感の輪を広げる。利用者が自己表現を磨き、将来的に活躍できるよう支援し、新たな才能の誕生を後押しする。

形成期の目標

千代田区文化芸術プランと連携し障がい者アートを発信、地区連携と雇用促進を図る

17 福祉防災機能



10年後の到達点

災害時における区内でのえみふるの役割を明確化し、地域コミュニティでの受け入れ体制を整備。横のつながりを重視し、災害に強く支え合える地域コミュニティを構築する。

形成期の目標

CMNに参加し地域企業とネットワークを構築、被災者受入を想定した年1回の災害訓練を実施。

ロードマップ 17 項目の現在地

令和6（2024）年度の事業を17項目の観点から総括・分析し、数字と取り組んだ具体的な内容にまとめました。さらに、10年後の目標達成に向けて、次年度の重点的な取り組みや目標を合わせてお伝えします。それぞれの項目の数字は、前年度と比較したものはその増減を示し、新しく取り組んだものや、新たに成果としてお伝えしたい数字には「NEW」のアイコンがついています。ロードマップからみた取り組みや数字の達成度は、「笑みがあふれる」という名前の由来にちなみ、一目見てわかる表情のアイコンは達成に近づくほど「笑顔」で表現しました。

1 交流人口



交流人口
26,186人
(+3,764人)

ちよだんごカフェの開設で新たな交流

2024年度の交流人口は26,186人となり、前年を上回る結果となりました。

特に、マッサージ機の寄付によってほっとサロン利用が向上し、利用者数の増加につながった点は大きな成果です。さらに、新たに開設された「ちよだんごカフェ」は、えみふるの活動に新たなチャネルをもたらし、地域の方々が気軽に立ち寄れる交流拠点として機能しはじめています。

また、激励慰安会や納涼祭など、各種行事では過去最大の参加者数を記録し、利用者の認知度と関心の高まりが感じられる一年となりました。加えて、ちよだんごカフェの外部出店活動など対外的な接点も増加しており、えみふる全体の地域認知度は着実に向上しています。

今後に向けて

ちよだんごカフェの活用は一部で限定的となっており、全体的な展開や活用には今後の課題も残されました。

利用者活動、交流と情報発信の中核拠点として積極的に活用していくとともに、より快適で過ごしやすい環境づくりの整備を進めていく方針です。



2 地域活動支援センター



交流人口
15,010人
(-224人)

参加がつなぐ地域の輪

2024年度の地域活動支援センターの利用者数は15,010人となり、前年比224人の減少となりましたが、各行事では過去最高の参加者数を記録するなど、地域との接点を広げる取り組みが充実した一年でした。特に「ほっとサロン」の利用率が向上し、日常の安心できる居場所として、より多くの方に親しまれるようになっていきます。一方で、リハビリテーション関係の講習会については、昨年度と比較して利用率に大きな変化はなく、安定的な実施が続いています。業務負荷軽減のため、公開講座の開催数は一部削減しましたが、講座内容のレパートリーは維持し、地域ニーズに応える工夫を継続しました。内容の質と継続性を両立させながら、地域との信頼関係を丁寧に積み重ねています。

今後に向けて

今後は、業務負荷とのバランスを意識しつつも、講座やサロンの質と頻度の最適化を図り、より多くの当事者や地域住民が気軽に参加できる体制づくりを進めていきます。参加者の声を反映したプログラム改善や、他事業との連携による相乗効果を生み出し、地域全体のつながりと共生の土台をさらに広げていきたいと考えています。



安心から、未来へつなげる場所

2024年度の利用者数は361名となり、前年度より161名の減少となりました。

その一方で、今年度は従来の就労系事業所による説明会ではなく、“交流会”という形式を取り入れたことで、就労に対して長年不安と期待を抱えていた利用者が一歩を踏み出すきっかけとなり、前向きな変化が見られました。ぷらっと御茶ノ水は、安心できる「居場所」としての役割に加え、自己肯定感を高めながら次のステップへ進む“ジャンプ台”としての機能を果たすことができる場であると再認識されました。利用者が自分のペースで将来像を描き直し、実現に向けて準備できる空間づくりが進んだ一年でもありました。

今後に向けて

次年度は、既存利用者の安心できる居場所としての機能を大切にしつつ、新たな利用ニーズへの対応を強化します。ちよだんごカフェや相談支援事業と連携しながら、地域との接点を広げ、多様な背景を持つ方々が「自分らしい一歩」を踏み出せるような場づくりを進めていきます。福祉の入口としての役割をさらに充実させていきます。



利用者
361人
(-161人)

安心して過ごせる受け入れ体制

2024年度の日中一時支援の利用者数は2,072人となり、前年の1,768人から304人の増加となりました。利用ニーズは引き続き堅調で、日常生活の一部を安心して過ごせる場として、多くの方に利用いただきました。支援にあたっては、過ごしやすさや満足度に配慮し、一人ひとりが落ち着いて自分らしく過ごせる時間の提供に努めました。また、利用前後のコミュニケーションを大切に、他部門との情報共有を密に行うことで、個々の特性や支援ニーズに応じた柔軟な対応を実現しました。今後も、余暇支援の提供や地域生活を支える重要な支援拠点として、質の高いサービスの継続を目指します。

今後に向けて

今後も増加傾向にあるニーズに応えるため、職員間の連携を強化し、より充実したプログラムの提供に努めます。申込多数時には公平な調整と代替サービスの案内を行い、利用希望にできる限り対応できるよう工夫します。利用者一人ひとりの特性に合わせ、過ごしやすさへの配慮と柔軟な支援の充実を図っていきます。



利用人数
2,072人
(+304人)

利用者ニーズを反映した安心の暮らしづくり

2024年度のグループホームは稼働率100%を維持し、安定した運営を継続しました。利用者が安心して暮らせる環境を守ることを第一に、生活支援や健康管理に丁寧に取り組みました。誕生日外出では一人ひとりの希望を反映した計画を立て、思い出に残る特別な時間を提供。外出先や食事内容も事前に相談し、本人の意思決定支援を最大限尊重しました。日常生活では利用者のペースに合わせた支援を行い、安心感と自己選択の機会を両立。さらに施設行事や公開講座を活用し、地域行事への参加や近隣住民との交流も継続しました。今年度は新たに給食設備を導入し、昼・夜に手作りの食事提供を開始。温かい食事を囲むことで生活の質や満足度の向上にもつながりました。

今後に向けて

来年度も稼働率100%の安定運営を継続しつつ、給食設備を活用した食事提供を充実させ、利用者が安心して過ごせる環境づくりを進めます。誕生日外出など個別ニーズに沿った支援を深めるとともに、地域交流の機会を広げ、生活の質と社会参加の両立をめざし、利用者一人ひとりの思いや希望を尊重し、意思決定支援を大切にしたい関わりを継続します。



利用率
100%
(±0人)

安心して過ごせる短期利用の場

2024年度のショートステイは、利用率92.8%と高い稼働率を維持し、地域における利用ニーズに応える拠点として安定した運営を行いました。利用者やご家族からの信頼に応えられるよう、日常生活の支援を丁寧に行い、安心して過ごせる環境づくりに努めました。今年度は新たに給食設備を導入し、昼食・夕食に手作りの食事を提供できるようになったことが大きな成果です。温かい食事を囲むことで、利用者が安心感を得るとともに、家庭的な雰囲気の中でリラックスして滞在できるようになりました。また、利用中の活動では、利用者の特性に応じた余暇支援要素を取り入れ、短期間ながらも充実した時間を過ごせる工夫を行いました。こうした取り組みにより、利用者の満足度と生活の質の向上につながっています。

今後に向けて

今後は稼働率のさらなる向上を目指し、利用者一人ひとりの特性に応じた支援や活動内容を充実させていきます。安心して過ごせる時間づくりを大切にしながら、緊急時の受け入れにも柔軟に対応できるよう体制を整備します。ご家族のレスパイト機能としての役割を重視し、地域に開かれた身近で利用しやすい短期利用の場を目指して取り組みます。



ひとりひとりに、よりそって広がる日常

2024年度の生活介護の利用者数は2,024名となり、前年より11名の増加となりました。今年度は、利用者の強みや関心に寄り添うことを重視し、2～3名の少人数によるサークル活動を展開しました。音楽・運動・調理・アートの4分野で年3回ずつ活動を実施し、創作や演奏を通じて利用者が主体的に楽しむ姿が多く見られました。また、活動を通じて「好き」や「できること」を再発見する機会ともなり、自己表現や人との関わりが広がる場にもなりました。社会参加を目的とした作品展示については、今後の連携先を広げながら、地域に向けて活動の魅力をさらに発信していくことを目指します。

今後に向けて

現在は「アクティブ」と「リラックス」の2グループに分かれて活動しており、利用者一人ひとりの特性やペースに合わせた多様な受け入れを意識した支援を進めています。来年度は、各グループの特徴をさらに活かし、より個々の関心に沿ったプログラムを充実させます。あわせて、地域との関わりや社会参加の機会を広げ、つながりを実感できる活動づくりを目指します。



つなぐ相談、育てる支援力

2024年度の基幹型相談支援では、576件の対応を行い、前年から150件の増加となりました。今年度は、計画相談支援との役割整理を重点的に進め、原則として基幹型相談が初動対応を担う運用に切り替えました。これにより、相談者の本質的なニーズを丁寧に把握したうえで、計画相談へと円滑に引き継ぐことが可能となり、支援の質の向上と業務の効率化の両立を実現しました。また、この初動対応の過程が、計画相談支援員の育成機会にもなり、組織全体の相談支援力の底上げにも寄与しました。さらに、例年実施している相談支援連絡会においては、事例検討会や研修の実施を通じて、相談支援員同士のつながり強化やスキル向上を図ることができました。

今後に向けて

今後は、相談支援連絡会の運営内容をさらに充実させ、地域課題の抽出と行政への提言につながるよう工夫していきます。事例検討や研修に加えて、地域資源の開発につながるテーマを明確化し、部会などとの連携を強化することで、地域に根ざした相談支援体制の質をより高めていくことを目指します。



基本に立ち返る相談支援

2024年度の相談実績は167件となり、前年より24件の減少となりました。今年度は、支援の質の見直しと基本の再確認を重点的に行いました。日々の進捗確認を丁寧に重ね、基幹型相談支援との連携を深める中で、自身の対応姿勢や支援内容の一つひとつ振り返る機会としました。結果として、相談員一人ひとりが支援力の底上げを実感できるような実践が広がりました。また、受け皿の整備にも力を入れ、将来的な対応力の確保に向けて、相談支援従事者初任者研修を新たに3名が受講しました。中長期的な視点で人材育成にも取り組み、質と体制の両面から支援力を強化する一年となりました。

今後に向けて

今後は、支援の質を維持しつつ、地域から寄せられる新たな相談にも可能な範囲で柔軟に対応していく姿勢を大切にします。相談件数の拡充とともに、丁寧に誠実な支援を継続して積み重ねていくことが求められます。個々の相談員の専門性向上と連携体制の強化を軸に、地域に根ざした支援の実践を進めていきます。



はちみつで広がる地域の輪

2024年度は、区内で行っている養蜂活動「はちみつ和花」の販売チャネルを拡大し、新たにちよだんごカフェでの取り扱いを開始しました。カフェの外部イベント出店時には店頭での販売も実施し、来場者との直接のやり取りを通じて認知度を高めることができました。特に、これまでの標準サイズに加え、小瓶（40g）サイズを新たにラインナップに加えたことで、「まずは試してみたい」という声に応えやすくなり、手に取りやすい商品として好評を得ました。年間販売数は194個に達し、カフェ利用者や地域住民だけでなく、イベント来場者にも広がりを見せています。また、養蜂活動を通じた環境教育や福祉的就労の側面も継続し、製品を通じて障がいのある方の活動や地域とのつながりを自然に発信する機会となりました。こうした販売・交流の場を通じて、「はちみつ和花」が地域の中で親しまれるブランドへと成長しつつあります。

今後に向けて

今後は、ちよだんごカフェでの販売を継続しつつ、外部イベントや地域行事など販路をさらに広げます。特に地域のはちみつとして区内の飲食店向けの卸や外部販売委託にも取り組み、日常的に「はちみつ和花」に触れられる環境を整えます。商品の魅力と養蜂活動の意義を広く伝え、地域貢献と障がい者の活動発信の両面を一層強化していきます。



共に歩む、企業とのつながり

2024年度は、計7社との企業連携を実施しました。各企業の特性や強みを活かし、体験会、季節行事での協力、屋上菜園、絵本やスタンプの提供、ボランティア活動、作品展示など、さまざまな形でつながりが広がりました。特に、利用者が制作した作品を企業内に展示してもらったり、企業からプレゼントや体験の場を提供してもらうなど、地域と企業の好意的な関与が福祉の現場に活かされています。また、今年度からは新たに企業の新任社員研修としての受け入れもスタート。福祉の現場にふれる体験を通じて、障がいや支援への理解を深める貴重な機会となりました。これらの活動は、利用者にとって社会とのつながりや自己表現の場となると同時に、企業にとっても地域貢献のきっかけとなる良好な連携へと育ちつつあります。

今後に向けて

これまでの企業連携は施設内での受け入れが中心でしたが、今後は職員や利用者が企業を訪問したり、利用者の作品を展示してもらうなど、施設外での連携を増やしていきます。福祉と企業の接点を広げ、地域全体で共に学び合える関係づくりをめざして取り組んでいきます。



学生と共に育む学びと交流

2024年度は、4校との連携を継続・拡充しました。養蜂活動の協力や交流プログラムを通じて、学生が地域資源や福祉的就労に触れる機会を提供し、学びと実践の両面で成果をあげました。また、施設行事や交流活動に学生が参加し、利用者と直接関わることで相互理解を深めることができました。さらに、新たな協働として納涼祭ではゼミ生が主体となってブースを運営し、利用者や地域住民と交流を重ね、学生にとっては実践的な学びの場、施設にとっては行事の充実につながりました。また、ふれあい実習の受け入れも実施し、学生が福祉の現場を体験しながら学べる機会を確保しました。こうした取り組みにより、大学との協働は地域交流の活性化と福祉教育の推進に寄与しています。

今後に向けて

来年度は、既存の大学との連携をさらに深めるとともに、新たな協働の可能性も探っていきます。養蜂活動や行事での取り組みを継続しつつ、ふれあい実習や交流プログラムを通して、学生が利用者や地域と関わる場を増やします。大学との協働を通じて、福祉教育と地域交流の双方を発展させていきます。



ボッチャで広がる交流の輪

2024年度は、アダプテッド・スポーツの推進として、ボッチャを通じた多様な交流の場を展開しました。区内の小学校に出向き、児童と利用者が一緒にプレーする交流会を実施。世代や立場を超えた交流を通じて、障がいのある方への理解や関心を自然に深める機会となりました。

また、新たな試みとして、日比谷公園でのボッチャ体験会を開催。開放的な屋外空間で、地域住民や来園者が気軽に参加できる体験会を実現し、幅広い層への競技普及につながりました。

さらに、納涼祭や福祉まつりでは継続して「ボッチャひろば」を設け、社会福祉協議会やボランティアアグループとの協力体制のもと、継続的にイベントを実施。こうした活動を通じて、ボッチャが単なるスポーツにとどまらず、地域の交流や共生の象徴として根付く一年となりました。

今後に向けて

アダプテッド・スポーツの普及を目的に、地域へ積極的に出向く取り組みを広げていきます。学校や地域団体との連携を深め、イベントや地域行事での体験機会を増やすことで、障がいの有無や世代を超えて楽しめる環境を整え、交流と共生の輪をさらに広げていきます。



子どもたちと育む、福祉のまなざし

2024年度は、将来の地域福祉を担う人材育成の一環として、小中学生との交流や職場体験の受け入れを再開しました。コロナ禍で中断していた取り組みが再び動き出し、小学校でのボッチャ教室の開催も実現。当事者の協力を得て、質疑応答を交えた双方向の福祉教育の場をつくることができました。学校の児童たちが積極的に質問をしたり、実際に競技にふれて楽しむ姿が見られ、障がいのある方への理解を深める貴重な機会となりました。また、施設での体験や交流を通じて、子どもたちが福祉に関心をもつきっかけづくりにもつながりました。

今後に向けて

今回のボッチャ教室では当事者にご協力いただき、充実した福祉教育を行うことができましたが、協力体制の確保が毎年可能とは限らず、今後の継続には工夫が必要です。来年度は施設での受け入れだけでなく、職員が学校へ出向き、子どもたちに福祉の考え方や現場の姿を伝える取り組みをさらに広げていきます。



地域に広がるボランティアの力

2024年度は延べ260人のボランティアが活動に参加し、施設運営や行事、日常活動など幅広い場面で力を発揮しました。特に納涼祭では63人が参加し、会場運営や来場者対応、企画ブースの運営などを担当。中にはボランティア主体で企画から運営まで担ったブースもあり、イベント全体の魅力向上に大きく貢献しました。日常活動では利用者の活動サポートや企業ボランティアによる支援が行われ、創作活動の補助や屋外活動での移動サポートなど、多様な形で利用者との交流が生まれました。地域住民、企業、学生など多様な背景を持つ人々の関わりが、施設全体の活気や相互理解の促進につながっています。

今後に向けて

既存のボランティアとの関係を深めつつ、新たな参加者の裾野を広げる取組を強化します。行事や日常活動の中で役割や活躍の場を明確にし、参加意欲を高める仕組みを整備します。また、地域や企業との協働をさらに推進し、多様な人材が関わることで利用者支援の質を高め、施設全体の活性化と相互理解の促進を図ります。



ひらかれた表現の場から

2024年度は、ちよだんごカフェの開設を契機に、障がいのある方の活動や魅力を地域に発信する新たな取り組みが始まりました。8月には、養蜂プロジェクトに関する展示会を実施。活動の様子を紹介しながら、自然と共に働く姿を伝え、地域とのつながりや関心を高める場となりました。また、生活介護事業において利用者が制作した作品の展示もカフェ内で実施され、来訪者との新たな交流のきっかけとなりました。表現を通して、利用者自身が自信や達成感を得る機会にもつながっています。一方で、ちよだんごカフェを活用した文化発信の活動は限定的であり、明確なコンセプトをもって継続的に展開するまでには至らず、単発的な取り組みにとどまった点が課題として残りました。

今後に向けて

今後は、ちよだんごカフェを活用したアートや創作活動の展示機会を定期的に設け、障がいのある方の表現や想いが自然に地域へ届くような仕組みを整えていきます。多様なスタイルの発信を通じて、地域との新たなつながりを育み、障がいのある方の文化的な存在が尊重される土壌づくりを進めていきます。



地域と共に備える防災体制

2024年度は、防災への取り組みをさらに強化しました。区の職員と連携し、避難所設営訓練を実施。災害時を想定し、利用者や地域住民を受け入れるための動線確認や物資配置を行い、現場での課題を共有しました。また、毎月の防災訓練を継続し、職員一人ひとりが災害発生時に即応できる体制を整備しました。さらに、寄付金や補助金を活用して防災備蓄を充実させ、10年保存水の補充、防災トイレの各トイレへの設置、ランタンの整備を実施しました。あわせて、大容量バッテリーを購入し、停電時でも必要な機器を稼働できる体制を確保。安心して利用できる備えを進めました。これらの取り組みは施設だけでなく、地域全体における防災力の底上げにつながっています。

今後に向けて

来年度は、避難所運営に関わる実践的な訓練をさらに充実させ、地域住民や関係機関と協働した体制を強化します。防災備蓄も定期的に点検・更新を行い、保存水やトイレ、照明器具、バッテリーなど必要な物資を確実に整備。誰もが安心して避難生活を送れる環境を整え、地域に開かれた福祉拠点として防災機能を一層高めていきます。



公式サイト



X (旧 Twitter)



Instagram



Facebook



地域活動支援センター

講習会・各種リハビリテーション、療浴サービス、ぷらっと御茶ノ水

日中一時支援事業（スマイルちよだ、レスパイト、タイムケア）

グループホームふぁみりあ（定員：4名）

ショートステイふぁみりあ（定員：1日当たり4名）

生活介護事業（定員：20名）

基幹型相談支援事業

特定相談支援事業（計画相談）

社会福祉法人 武蔵野会
千代田区立障害者福祉センターえみふる

発行：令和7（2025）年12月

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2丁目5

TEL：03-3291-0600 FAX：03-3291-0608

Email：emifuru@chime.ocn.ne.jp

ホームページ：<https://emifuru.com>